
紅薔薇

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅薔薇

【Nコード】

N1057P

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

君が好き。

好きで、胸が痛い。

わたしが薔薇なら、君の血で紅く染まりたい、それほどに君を愛してる。

ねえ、君も誰かを愛しく思っ泣く夜があるの？

ねえ、君も誰かが愛しすぎて胸が痛むことがあるの？

もっと、もっと泣けばいいのに。

もっと、もっとその目を潤ませて懇願するように、哀願するように、苦しくてたまらないと胸をかきむしって涙を流せばいいのに。

痛い顔を見せて。

そのすべらかな頬に涙を流してみせて。

痛みだけが真実だとしか思えないわたしに、確かにそうだと確信させて。

愛してるなんて言葉はどうせ時が経てば風化する、色褪せて握り締めた手の中で音もなく壊れる。それならまだ、消えない傷を残すほどの痛みを与えて、そこから流れる血の色、その方がよっぽどの本物。

わたしは薔薇になりたい。

鋭い棘を全身にまとうて、しならせて、君の肌に食い込んでやわらかな皮膚を引き千切るから、痛みを唇を噛んで血を流してみせて。君の血を吸い込んで、取り込んで、わたしはなによりも輝く紅薔薇になってみせるから。

わたしの犬歯が獣のそのように正しく鋭く伸びていたのなら、君の喉元を食い破って血を啜るのに。君の悲鳴にくちづけて、すべて飲み干してあげるのに。

わたしは獣になりたい。

肉食の獣。

血の匂いにただ本能から興奮するおろかな獣になりたい。

君の骨も肉も噛み砕いて血も飲み干して、自分の胃に収めたのならきつと安心できるのに。君から愛されていたと信じることができるかもしれないのに。

ねえ、君も愛しさに胸を詰まらせて、声を押し殺して泣く夜があるの？

ねえ、君も愛しさを自分ばかりが募らせているかもしれないと震えたりするときがあるの？

「背中」

「背中？」

「綺麗」

「自分じゃ見えないから分からないよ」

君の背は薄い。肩甲骨がくつきりと形を浮かび上がらせている。これが翼の名残だなんていうのはきつと嘘だ、これはこれから翼になる途中のもの。男の人にしては薄い肩や、細い二の腕や、平らなお腹だとか丸い指先だとか。君が天使だというのならわたしはそれを信じる、ほんの少しの疑いも持たずに。いつかこの肩甲骨は翼に変わる、皮膚を破いて血を滴らせて、それでいて穢れない真珠色の美しい羽を広げる。

その時、わたしが傍にいられたらいいのに。

君の肩甲骨を撫でながら、わたしは目を瞑る。想像する。君の翼。空を飛ぶための、自由。そのまま君の背中に頬を摺り寄せる。わたしの体温は低いはずなのに、君の背中はもっとひんやりしている。ずっと裸でベッドに腰掛けていたせいだ。生まれたままの姿で、いたせいだ。

「また泣いてる？」

「……なんで？」

「あなたは、泣き虫だから」

泣いてなんかいいよ、と答えようとしたのに、自分の頬が濡れているのに気付いてしまったからなにも言えなかった。わたしが泣き虫なのは、君を好きなせいだ。君を思うと胸が詰まる。会えない夜には会いたくて、会っている今は会えなくなる数時間後を想像して、どうしていつそ溶け合ってしまったのかと絶望する。

わたしは君に生まれてくればよかったのに。

そうしたら、一勝鏡の中の自分にくちづけて幸せに生きていけたのに。

「……噛んで、いい？」

「いいよ、どこ噛みたい？」

「……腕、」

本当は喉元に食らいつきたいのに、我慢してそう言う。君はわたしの名前を呼んで、こちらを向いてくれる。腕を差し出して。

「噛んでいいよ」

「……嘘、わたしを噛んで」

「やだ、痛そうだから」

「痛いのがいいの」

「なんで」

「……痛くされたら、残るもの」

記憶が。君が。わたしに。

うんと痛くして欲しい、死んでしまふ寸前までぼろぼろに噛んだり傷つけたりして欲しい、消えない傷が欲しい、君がわたしと一緒にいてくれた時間の分だけ、君がもしかしたらわたしを好きだったかもしれないと勘違いできるように。わたしが。

「痛い記憶なんて残すなよ」

胸の痛みは苦しいのに、身体の傷は欲しいなんてわたしはおかしいのかもしれない。君が好き。いつかわたしがいなくなっても、想いは残って君の幸せを願い続けられたい。

「痛いのは、分かりやすいから」

愛されていると思い込むことができるから。

「あなたが痛いのは嫌です」

「わたし、頭の中では君にうんとひどいことしてるよ」

「……なにしてるの？」

「わたしは白い薔薇でね、君の皮膚を切り裂いて血を吸って、紅く染まるの」

「あなたが、紅い薔薇になるの？」

「うん、君の血に染まって」

ふうん、と君はつぶやく。伸ばされていた腕はわたしの頭の後ろに入り込んで、胸元に引き寄せたから驚いて体勢を崩す。言わなきゃよかったかな、と思ったのは、くだらない妄想だから。

「泣き虫」

「え、なに、」

「泣きそうな顔してる」

君の胸にわたしの頬は押し付けられている、心臓の音はやわらかい。

「わたしの顔なんか、見えてないのに」

「見えなくたって分かる」

俺のこと好きすぎるくせに。

言われて息が止まる。

どうしてそれを、知っているの。

「あなたは俺のこと好きすぎて、いつも泣きそうな顔してるもん」
うぬぼれないで、と言えない、本当のことだから。

「それでいて、俺が好きって言うてもちつとも信じてくれなくて泣くんだよ」

「だって、」

「あなたは自信がなさ過ぎ」

「……愛されてる自信がある人なんているの？」

「俺」

即答されて言葉に詰まる。俺、って。

「あなたにおぼれるほど愛されてる。自信あるよ？」

ごめんね、の言葉が続けて君の唇からこぼれて、なんだか触れている肌の温度が上がった気がした。

「愛されてばっかで、俺の愛情上手く伝えられなくてごめん、俺の血でああなたが紅く染まってそれが愛の証になるんなら、どこでも切ったりしていいよ」

結構好きなんだけどなあなたのこと、と言われて、わたしは赤面しながらうつらたえる、そんな、言葉なんていつか嘘になるもので、こんなに幸せになってしまふのは。愚かなのではないかと。思っ
てあなたの血を吸って紅い薔薇になりたいのに、あなたの腕の中でわたしはすべての棘を失くす。好きすぎて苦しいなんて、ばか
げている、母親を求める子供でもないのに。

「……君は、好きって気持ちに胸が押しつぶされて、泣きたく
なる夜とかは、ないの？」

「好きって気持ちは、俺を幸せにしかないから、そんな夜はない」
君は、と言いかけたときに身体を引き離された。二の腕をつかま
れて、引き剥がすように。え、と思っ
てもう哀しくなる、おろおろ
とする、わたしは君の機嫌を損ねることを口にしてしまったのかと
だけど慌てて仰いだ君の唇はやわらかく持ち上げられていて笑っ
ている。

ねえ。

わたし、君が好きだよ。

唇が静かに重ねられる。わたしは目を閉じて、君の体温を感じる。
匂いを覚えておこうと必死になる。

君が好き。

それだけでもう。

胸が痛い。

こんなに好きでどうしようと、泣くしかできないわたしを笑って
いつかの翼を肩甲骨に隠し持つ、わたしの恋人。甘い声の持ち主。
「ごめん、あなたが泣くたびに俺は愛されてる実感でぞくぞくする」
君の血でなくて、君の体温ですら紅く染まるわたしを。

どうか、どうかいつまでも。傍に置いて、飽きて捨てるときはど
うか。

一瞬で、枯らせて。わたしを。その手で粉々に砕いて。壊して。
だってもう、わたしは棘のすべてを抜かれた自分の身も守れない、
薔薇なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1057p/>

紅薔薇

2010年11月23日23時25分発行